源信における「無量寿三諦説」成立の再考

村上明也

問題の所在

恵心僧都源信（九四二―一〇一七、以下、源信と略す）が長和三年（一〇一四）に撰述した『阿弥陀経略記』[①]には、無量寿の一字ずつに空仮中を観じる「無量寿三諦説」と呼ばれる思想があり、従来からその成立をめぐって様々な議論が行われている。

また無量寿三諦説は、『観心略要集』における「阿弥陀三諦説」[②]の先駆をなす思想として殊に注目されてきたが、源信真撰としてほぼ間違いないと考えられる『阿弥陀経略記』の無量寿三諦説と偽撰説が濃厚な『観心略要集』[③]の阿弥陀三諦説とには、内容的にも一線を画する必要があるため[④]、無量寿三諦説の成立こそ、源信浄土教だけでなく、その後の叡山浄土教の展開を窺う上でも解明を急ぐべき問題といえよう。

さて無量寿三諦説の成立に関する先行研究は、以下の四点に集約できる。

①『往生要集』における「三身一体観」から成立[⑤]

②源清（？―九九八）著『観経疏顕要記』を手がかりとして成立[⑥]

③『摩訶止観』や『大乗起信論』を根拠とした如来蔵説から成立[⑦]

④源信創出に疑義が呈され、口伝法門からの成立⑧

しかしながら、これら①～④は『阿弥陀経略記』の無量寿三諦説のみを扱い、それ以外の思想については積極的に論じられていない。そこで『阿弥陀経略記』を詳細に検討してみたところ、他に重要と目される思想が所々に散見され、無量寿三諦説だけが本書の要ではないと考えられてきた。

ここで注目したいのは、『阿弥陀経略記』の「無縁慈悲釈」という思想である。この「無縁慈悲釈」は、『阿弥陀経』の密意であること、『往生要集』が思想基盤となっていること、本有己心の六即阿弥陀仏を顕すことなど、多く「無量寿三諦説」と軌を一にしており、『阿弥陀経略記』の中でも特に重要な思想といえる。

したがって本稿は、『阿弥陀経略記』の無量寿三諦説と無縁慈悲釈の関係から浮かび上がってくる教学を見極め、無量寿三諦説の成立を『往生要集』の「三身一体観」に求める佐藤哲英博士及び花野充昭先生の主張をより補強することを意図している。

一、先行研究の概観とその問題点

はじめにも述べたように、無量寿三諦説の成立に関する見解は、学者間で一様でない。そこでまず先行研究を概観し、同時にそれらに対する問題点も指摘してみたい。

佐藤哲英博士と花野充昭先生の見解

無量寿三諦説が『往生要集』における「三身一体観」から成立すると主張されたのは、佐藤哲英博士と花野充

昭先生である。「三身一体観」とは、寛和元年（九八五）に完成した『往生要集』[9]大文第四の観察門に、阿弥陀仏が三身を具えた一仏であると説く内容を指している。そしてこの「三身一体観」こそ、最晩年の『阿弥陀経略記』に至って三諦を配するようになったと考えられてきた。

ところで筆者は、佐藤博士らの見解に異議を挟むつもりはなく、むしろこの主張に賛同している。そして今回新たに「三身一体観」を示す文が『往生要集』大文第四の作願門からも看取されてきたので、無量寿三諦説が『往生要集』の観察門のみから成立したのではなく、作願門にも成立を担う根拠があったことを論じたい。

福原隆善博士の見解

次に源清著『観経疏顕要記』を手がかりに無量寿三諦説が成立したとみるのは、福原隆善博士である。すなわち博士は、天台山外派の人師として著名な源清の『観経疏顕要記』に

色身應ナリ也。法門報ナリ也。実相法ナリ也。可シ対レ二空假中一ニ。応身ハ即チ假ナリ。又タ一々ノ身無作ナルハ、即チ空中ナリ。皆法界ナルカ故ニ。

（『恵全』一・四四二頁）

とある文を、本書巻上の批評を担当した源信が『顕要記破文』で次のように答えたことを拠り所とされる。

此ノ中ニ應ニレヘシ云フ二報身ハ即空。法身ハ即中一ト。恐クハ是ノ二一句落ルカ歟。不シテレ俟タ説ヲ知ル二文猶ホ未タレト具セ。

（『恵全』一・四四二頁）

ここで源信は、『観経疏顕要記』の「応身は即ち仮なり」には、以下「報身は即空」と「法身は即中」との二句が欠落しているとみたのである。

確かに『顕要記破文』[10]は、無量寿三諦説の構成要素である三身と三諦とを同時に列ねるが、本書にはまず『往生要集』の「三身一体観」がその背景にあるといえる。つまり、「即」で結ばれる三諦を法報応の三身に配釈す

る場合、この三身も必ず「即一」でなければならず、ここに『往生要集』の「三身一体観」が想起されるからである。よって、『顕要記破文』以前の『往生要集』に「無量寿三諦説」の萌芽ありと認めざるを得ない。

小山昌純先生の見解

また無量寿三諦説が『摩訶止観』や『大乗起信論』（以下、『起信論』と略す）を根拠とした如来蔵説から成立すると主張されたのは、小山昌純先生である。先生の最大の論拠は以下の『摩訶止観』と『阿弥陀経略記』の二文にあると思われる。

『摩訶止観』

一念心ハ即チ如來藏ノ理ナリ。如ノ故ニ即空、藏ノ故ニ即假、理ノ故ニ即中ナリ。三智ハ一心中ニ具シ不可思議ナリ。

（『大正蔵』四六・一〇頁の中）

『阿弥陀経略記』

無トハ者即空、量トハ者即假、壽トハ者即中、佛トハ者三智即チ一心ニ具ス。

（『恵全』一・四〇一頁）

つまり、『摩訶止観』と『阿弥陀経略記』との傍線部分が符合するという決定的な根拠を突き付けられたわけである。なるほどこの本文的一致は小山先生の主張を支えるに十分な論拠を与えており、『阿弥陀経略記』の無量寿三諦説は『摩訶止観』の文を援用して創造されたといえよう。しかし、この二文の一致をもって、果たして無量寿三諦説という「思想」が成立したとまで言い切れるだろうか。

小山先生の主張に従うならば、源信は晩年の『阿弥陀経略記』に至ってはじめて、『摩訶止観』の如来蔵説による無量寿三諦説を唱えたこととなり、「如来蔵」を「無量寿」に配当した理由については触れられてない。繰り返し述べるが、「即空即仮即中」の三諦が弥陀の梵語である「無量寿」に配釈されるということは、「無量寿」

の仏身も当然「三身即一」でなければならず、したがって『摩訶止観』の文に「無量寿」の三字を挿入する思想基盤こそ、『往生要集』の「三身一体観」にすでに容認せられるところであろう。

なお小山先生は、無量寿三諦説が衆生の己心に具わる六即阿弥陀仏を示すことから、六即阿弥陀仏の直前に引用される『起信論』をも無量寿三諦説の成立根拠とみているが、後述するように、源信が『起信論』を引用する箇所は、無量寿三諦説ではなく、無縁慈悲釈という別の密意を示す関係からである。そしてこの無縁慈悲釈においても、『往生要集』からの思想的連関が認められたので、無量寿三諦説の成立を『起信論』に求めることはできない。

梅田圓鈔先生の見解

最後に、源信が無量寿三諦説を創出したことに疑義を呈し、口伝法門からの成立とみたのは、梅田圓鈔先生である。梅田先生は、『阿弥陀経略記』を源信真撰とする立場に慎重な態度をとられるが、近年の研究成果を考え合わせても、本書は源信真撰とみてほぼ間違いないと考えられる。よって、梅田先生の主張は再検討を要するであろう。

以上、先生方の論旨を私的に解した点もあるかと思うが、筆者の目的は佐藤博士と花野先生の説を手掛かりに、無量寿三諦説の成立を『往生要集』に求めることである。

二、『阿弥陀経略記』の基本的立場

『阿弥陀経略記』の構成は、(一)大意を述べ、(二)題目を明かし、(三)文を分けて解釈する、といった三門分別を取り[11]、初めの大意では本書の目的が端的に示される。

> 初メニ大意トハ者、弥陀ノ本地應迹ハ難レ量リ。普ク徧二シテ十方一ニ、廣ク利二ス六道一ヲ。極楽ハ是レ其ノ一區ニシテ、彌陀ハ是レ其ノ一化ナリ。機感ニ有リテレ時、今偏ヘニ讃シテ説ク。是ヲ以テ至スコトレ心ヲ七日、觀二シ紫摩金ノ之尊容一ヲ、稱ヘテレ名ヲ十念スレハ、脱二ス火血刀ノ之苦果一ヲ。無縁慈悲ノ功ハ莫大ナルカナ哉。然ルニ此ノ經ハ者、其ノ取ルレナリ顕ヲ也。則チ息メテ二三有ノ之輪廻一ヲ、而達二ス七寶ノ之臺一ニ。其ノ探ルレナリ密ヲ也。則チ廃シ二三乗ノ之保證一ヲ、以テ歸二ス一實ノ之果一ニ。何トナレハ者若シ得レハ二開三顕一出世本懐一ヲ、焉ソ執セム二五時八教入理ノ之權説一ヲ。況ヤ復タ初心ノ昔時、尚ホ不ルヤレ退カ二大覺ノ之道一ヲ。極楽ノ後日、那ソ可ケムヤレ作ル二永滅ノ之人一ト。説ク時未タレハ至ラ、雖モ不トレ獲ラ二開示悟入ノ之名一ヲ、寶所ニ無シレ疑ヒ。猶ホ亦タ備フ二阿鞞跋致ノ之徳一ヲ而已。寄セテ二兩端ノ義一ニ敍フル一經ノ意一ヲ。網ノ目非サレハレ一ニ、豈ニ不ランヤレ得乎。
>
> (『恵全』一・三八一～三八二頁)

ここでは、七日間で紫摩金の尊容を観じ、阿弥陀仏の名を称えて十念すれば、三悪道の苦果から脱すると述べられるも、それは無縁慈悲の功徳が莫大なためであるという。また『阿弥陀経』の「顕意」は、三界輪廻を息め、七宝の台に達することとし、一方の「密意」は、開三顕一を得知したならば、五時八教という入理の権説に執着することはないといっている。

つまり、天台五時判において『阿弥陀経』は爾前教であるけれど、開三顕一を観じる「密意」だけは、第五時『法華経』と同一同味であると解せよう。そしてこの「密意」と「顕意」を縦横無尽に論じていくのが『阿弥陀

経略記』の基本的立場といえる。

では密意の内容は何であるのか。それらを纏めて記せば次の如くである。

①	雲路無碍ハ即空ナリ。持花飛行ハ即假ナリ。供養諸佛ハ即中ナリ。⑫
②	無トハ者即空、量トハ者即假、壽トハ者即中、佛トハ者二智即チ一心ニ具ス。⑬
③	無トハ者法空ハ即チ所縁ノ理ナリ。理性ハ即チ是レ法身菩提ナルカ故ナリ也。大般若經ニ云ハク。一切法空ヲ説ヒテ為ニ法界ト一。即チ此レ法界ヲ説ヒテ為ス二菩提ト一云云。縁トハ者能縁ナリ。即チ此レ般若ナリ。般若ハ即チ此レ報身ノ菩提ナリ。慈悲ハ利生ナリ。即チ是レ解脱ナリ。解脱ハ即チ是レ応身菩提ナリ。⑭
④	十方ハ即空ナリ。國土ハ即假ナリ。諸佛ハ即中ナリ。⑮
⑤	言フハ二三徳ト一者、人ハ即チ法身ナリ。如シ言フカ下法身ノ體徧シテ二諸ノ衆生ニ一、萬徳凝然、性常住ナリ。不生不滅ニシテ無ク二去來一、不一不異ハ非スト中断常ニ上也。願ハ即チ般若ナリ。故ニ願波羅蜜ハ、攝二在セラルル於般若一ニ也。往生極楽ハ即チ解脱ナリ。⑯
⑥	以テ下縁生ノ法ハ無キヲ上レ不ト云フコト二即空即假即中一ナラ、亦タ如ク理ノ思ヘ。⑰

一見して明らかなように、①～⑥にはすべて「三諦（即空、即仮、即中）」、もしくは「三徳（法身、般若、解脱）」が配釈され、密意同士の内容に深浅差異はみられない。また①～⑥の文頭には、「観解」や「深観」なる語が付されており、これら一連の文によって密意を構成していることもわかる。

①「此ノ中應レヘシ作ス二三諦ノ觀解一ヲ」

②「若シ作サハ観解ヲ一」
③「若シ欲セハ修サント深観ヲ一者」
④「又タ作サハ観解ヲ一」
⑤「試ミニ作サハ観解ヲ一」
⑥「又タ皆ナ観解ス」

すなわち『阿弥陀経略記』におけるすべての密意を列挙することで、空・仮・中の密意である②「無量寿三諦説」のみならず、法身・般若・解脱の密意をも検討する必要性が生じてきたわけである。そこで源信壮年期の『往生要集』と関係の深い③「無縁慈悲釈」について以下論じていくこととする。

三、無縁慈悲釈と『往生要集』作願門

「無条件の慈しみ」を意味する無縁慈悲は、『往生要集』大文第四の作願門において「二ニハ縁トスル理ヲ四弘ナリ。是レ無縁ノ慈悲ナリ也。」とあり、理の四弘誓願と同義に捉えられている。[18]

ところが、『阿弥陀経略記』の無縁慈悲釈は、『往生要集』作願門における事の四弘誓願とも関係の深いことがわかってきた。『阿弥陀経略記』と『往生要集』の当該箇所及びその図を示しておきたい。

『阿弥陀経略記』

意ニ云ハク。無トハ者法空ハ即チ所縁ノ理ナリ。理性ハ即チ是レ法身菩提ナルカ故ナリ也。大般若経ニ云ハク。一切法空ヲ説ヒテ為ス二法界ト一。即チ此レ法界ヲ説ヒテ為スト二菩提ト一云云。縁トハ者能縁ナリ。即チ此レ般若ナリ。般若ハ即チ此レ報身ノ菩提ナリ。慈悲ハ利生ナリ。即チ是レ解脱ナリ。解脱ハ即チ是レ応身菩提ナリ。由リテ此レニ當ニ レヘシ知ル。無縁慈悲ハ、是レ即チ

諸佛三身ノ萬徳ナリ。

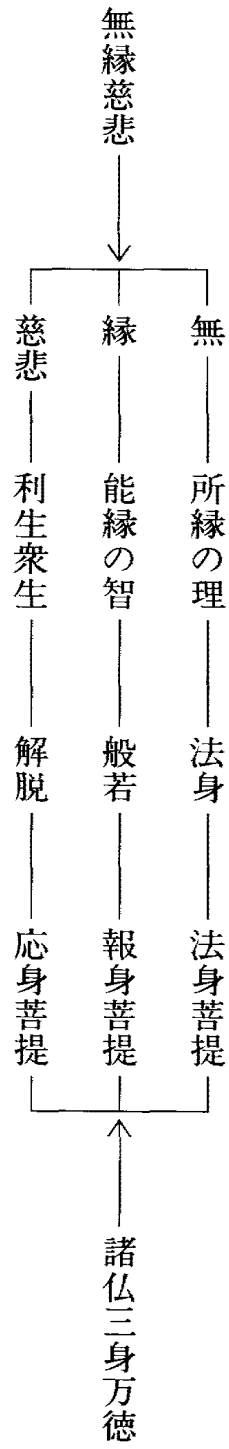
（『恵全』一・四一二頁）

『往生要集』

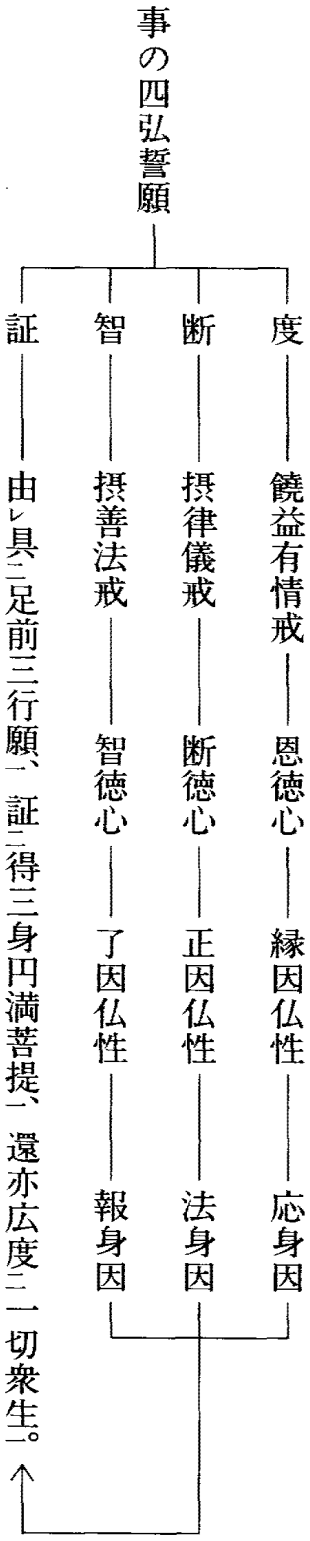
言フハ二縁トスルレ事ヲ四弘ト一者、一ニハ衆生無邊誓願度ナリ。應ニレヘシ念ス。一切衆生ニ悉ク有リ二佛性一、我レ皆ナ令メントレ入ラ二無餘涅槃一ニ。此ノ心ハ即チ是レ饒益有情戒ナリ。亦タ是レ恩徳ノ心ナリ。亦タ是レ縁因佛性ナリ。應身ノ菩提ノ因ナリ。二ニハ煩悩無邊誓願斷ナリ。此是レハ攝律儀戒ナリ。亦タ是レ斷徳ノ心ナリ。亦タ是レ正因佛性ナリ。法身ノ菩提ノ因ナリ。三ニハ法門無盡誓願知ナリ。此是レハ攝善法戒ナリ。亦タ是レ智徳ノ心ナリ。亦タ是レ了因佛性ナリ。報身ノ菩提ノ因ナリ。四ニハ無上菩提誓願證ナリ。此是レハ願ニ求スルナリ佛果菩提一ヲ。由リテ三具ニ足スルニ前ノ三ノ行願一ヲ、證ニ得シ三身圓滿ノ菩提一ヲ、還リテ亦タ廣ク度スルナリ二一切衆生一ヲ。

（『恵全』一・七四～七五頁）

『阿弥陀経略記』⑲



『往生要集』



『往生要集』の事の四弘誓願は、「度」「断」「智」の前三願に三聚浄戒、三徳、三因仏性を配し、「証」こそが前三願を具足した三身円満なる菩提であるという。また『阿弥陀経略記』は、無縁慈悲を「無」、「縁」、「慈悲」とに分け、そこに能縁、所縁、利生、及び三徳、三身を数法的に配釈する。

まず両書の「三身」に限って論じてみると、『阿弥陀経略記』は「無縁慈悲＝諸仏三身万徳」という関係から、法報応の「三身菩提」を分出させており、他方、『往生要集』の事の四弘誓願には、「三身因」とあって、その因が果となったものを「三身円満菩提」と呼んでいる。つまり、両書は三身の因果関係が逆転しているだけで、その構造自体は同じなのである。

また『阿弥陀経略記』の「三徳」も、『往生要集』における「三徳」と関係の深いことが窺える。しかしながら、『往生要集』の三徳には恩、智、断が、また『阿弥陀経略記』の三徳には法身、般若、解脱が使用されており、両書の「三徳」は名目からすでに異なっている。ところが、『阿弥陀経略記』の八年前に撰述された『一乗要決』[20]には、天台の三因仏性を論じる箇所で以下のようにいうのである。

三徳ト三身ト名異ナレトモ義同シナルカ故ニ今用フ之ヲ。（『恵全』二・一九〇頁）

ここは、『法華文句』引用直後の割注に当たり、三身と三徳を同義異名に理解させていることがわかる。無論、この三徳は法身・般若・解脱を指し、さらに『一乗要決』は三身と三因仏性の同一関係にまで言及するのである。[27]

すなわち、『一乗要決』に三徳、三身、三因仏性の思想的連関が認められるということは、『往生要集』における三徳、三身、三因仏性の関係が当然予想されねばならず、加えて『阿弥陀経略記』の「無」、「縁」、「慈悲」に配される三徳や三身も、その萌芽に『往生要集』の作願門があるとみて差し支えなかろう。

四、無量寿三諦説と『往生要集』作願門

次に『阿弥陀経略記』の無量寿三諦説について一言したい。この思想は以下の文より導き出されたものである。

若シ作二観解一ヲ、無トハ者即空、量トハ者即假、壽トハ者即中、佛トハ者三智即チ一心ニ具ス。應レヘシ知ル。圓融三觀ノ之智、冥シテ二於圓融三諦ノ之境一ニ、萬德自然ニ圓ナルヲ、名ク二阿彌陀佛一ト。衆生ハ無始ヨリ、從リ因生ス果レヲ。具ニ有リ二六即阿彌陀佛一。至リテ下ニ當レヘシ知ル。

（『恵全』一・四〇一頁）

ここでは、円融三観の智（仏）と円融三諦の境（無量寿）が冥合して、万徳が自然に円かなることを阿弥陀仏と名づけ、衆生は無始以来、因から果に至る存在であるため、心に六即阿弥陀仏を有しているという。

叙上の如く、予てから無量寿三諦説は、佐藤哲英博士や花野充昭先生によって『往生要集』観察門における「三身一体観」から成立すると考えられてきた。その主張の根拠は以下の文である。

彼ノ佛ハ是レ三身一體ノ之身ナリ也。

（『恵全』一・一〇七頁）

是ノ故ニ三世十方ノ諸佛ノ三身、普門塵數ノ無量ノ法門、佛衆ノ法海、圓融ノ萬德、凡テ無盡ノ法界ナルモ、備リテ在レハ二彌陀ノ一身一ニ、不レ縱ナラ不レ橫ナラ、亦タ非ス二一異一ニ。非レ實ニ非レ虛ニ、亦タ非ス二有無一ニモ。本性清淨ニシテ心言ノ路絶ヘタリ。譬ヘハ如シ二如意珠ノ中ニハ非レ有ルニモ寶、非サルカ無キニモ寶。佛身ノ萬德モ亦復タ如シ是レノ。

（『恵全』一・一〇七頁）

所觀ノ衆相ハ即チ是レ三身即一ノ之相好光明ナリ也。諸佛同體ノ之相好光明ナリ也。萬德圓融ノ之相好光明ナリ也。

色ハ即チ是レ空ナルカ故ニ、謂フ二之レヲ眞如實相一ト。空ハ即チ是レ色ナルカ故ニ、謂フ二之レヲ相好光明一ト。一色一香無シレ非二サルコト中道一ニ。受想行識モ亦復タ如シレ是ノ。我カ所有ノ三道ト與二彌陀佛ノ萬徳一ト、本來空寂ニシテ一體無礙ナリ。願クハ我得テ佛ヲ齊二シカラン聖法王一ト。已上ハ依二ル觀經・心地觀經・金光明經・念佛三昧經・般若經・止觀等ノ意一ニ。

（『恵全』一・一〇八頁）

すなわち、三身一体観とは、三世十方の諸仏の三身、普門塵数の無量の法門などの円融万徳をすべて阿弥陀一仏に具えさせることで、衆生が観じる衆相も、三身即一、諸仏同体、万徳円融の相好光明であるという。また色即是空のゆえに真如実相、空即是色のゆえに相好光明といい、一色一香も中道でないことはなく、自らの所有する三道と弥陀の万徳とは、本来的に空寂で一体無碍であるともいっている。

ところが、このように三身を一体とみる考え方は、『往生要集』作願門における事の四弘誓願の「無上菩提誓願証」にも説かれていた。

四ニハ無上菩提誓願證ナリ。此是レハ願二求スルナリ佛果菩提一ヲ。由リテ二具二足スルニ前ノ三ノ行願一ヲ、證二得シ三身圓滿ノ菩提一ヲ、還リテ亦タ廣ク度スルナリ二一切衆生一ヲ。

（『恵全』一・七五頁）

「無上菩提誓願証」とは、前三願を具足した三身円満なる菩提を証得することであるから、前の観察門の「三身一体観」と同様の旨が抽出されよう。

したがって、無量寿三諦説成立の鍵を握る「三身一体観」は、必ずしも『往生要集』観察門だけに説かれるものでなく、作願門の菩提心釈からも看取することができるのである。

五、無量寿三諦説と無縁慈悲釈の関係

では、無量寿三諦説と無縁慈悲釈との関係は如何なるものであろう。『阿弥陀経略記』が無量寿三諦説を示す前段には、次のような興味深い記述がある。

> 於テ阿彌陀ノ一ノ梵語ノ中ニ、含ス無量光・無量壽ノ義ヲ一。（『恵全』一・四〇〇頁）

阿弥陀の梵語には「無量光」と「無量寿」の二義を含むことが示される。また『阿弥陀経略記』はこの二義に関して以下のようにもいう。

> 此ノ之二義ハ、顯ス二横竪ノ益ヲ一。無量光トハ者、顯ス二横ノ利物ヲ一。遍ク照シテ二十方ヲ一、攝スルカ二衆生ヲ一故ナリ。無量壽トハ者、顯ス二竪ノ利物ヲ一。經テ二無數劫ヲ一、利スルカ二衆生ヲ一故ナリ。二利常ニ圓ナリ。故ニ得ル二此ノ名ヲ一。（『恵全』一・四〇〇頁）

すなわち、無量光は「横」の利物を、無量寿は「竪」の利物を顕し、さらにこの横竪二利は常に円かであると述べられる。

そこから『阿弥陀経略記』は、一つの問答を挟んだ後、前掲した無量寿三諦説を展開するのであるが、この無量寿三諦説には「衆生ハ無始ヨリ、從リ因生スレ果ヲ。具ニ有リ二六即阿彌陀佛一。至リテ下ニ當レヘシ知ル。」とあり、六即阿弥陀仏との関係が示唆されていた。六即阿弥陀仏とは次のような内容を指している。

> 當レヘシ知ル。彼ノ佛ノ依正ノ萬德、無始ヨリ已來タ、在リ二己心ノ中一ニ。妄想遮リレ眼ヲ、雖モ未タレト能ハ見ルコト、法性ハ常圓ニシテ、實ニ無シ二增減一。若シ未タレハ得レ聞クコト、是レ理即ノ萬德ナリ。聽聞信解スルハ、是レ名字ノ萬德ナリ。一心ニ稱念スルハ、是レ觀行ノ萬德ナリ。蓮臺託生ノ後ハ、當ル二相似ノ萬德一ニ。百法明門ノ後ハ、即チ分眞ノ萬德ナリ。乃至究

竟ナリ。如ク理ノ應ニレヘシ思フ。（『恵全』一・四一五頁）

ここでは「阿弥陀仏の依正二報の万徳は、遠い昔から己心中に具わっているが、眼は妄想に遮られており、いまだ見ることができない。けれども、法性は増減するものではなく、常に円かである。もし聞くことができなければ理即万徳、聴聞信解すれば名字万徳、一心称念すれば観行万徳、蓮台託生すれば相似万徳、百法明門すれば分真万徳、そして（仏が）究竟万徳である」といっている。

すると往生を果たすためには、聴聞信解して（名字万徳）、一心に称念しなければ（観行万徳）、蓮の台に生まれる（相似万徳）ことはできないが、究極的には六即阿弥陀仏での己心の弥陀と無量寿三諦説で観じるところの無量寿仏とは何ら異なるものでない。[22]

しかしながら、無縁慈悲釈によっても己心に六即阿弥陀仏という本有性を示すことは可能である。『阿弥陀経略記』は次のようにいっている。

念佛ハ是レ行ナリ。故ニ亦タ得レ見ルコトヲ。何ニ況ンヤ身後ニ生ス二彼ノ国土一ニ。設ヒ有二ランモ優劣一、何ソ言フヤ無シトレ分。然ルニ観心勝レタリ。今モ亦タ順スレ彼ニ。前ノ因リテ二無縁ノ慈一ニ、略シテ示ス二本有ノ性一ヲ。今重ネテ依リテ二教文一ニ、當ニレヘシ助ク二念佛ノ行一ヲ。（『恵全』一・四一五頁）

ここでは、たとえ見仏したとしても、どうして身体が生滅した後に弥陀の国土に生じるのかが問われており、これに対して源信は、たとえ優劣があっても、意味のないことではないと述べ、観心が勝れているからこそ、念仏に順ずることを論じる。さらにそれは無縁の慈悲によって本有性を示すことであるともいう。

その後『観経』及び『起信論』を教証にして、[23]我々の本有性を力説する『阿弥陀経略記』は、直後に六即阿弥陀仏の文を展開するため、『起信論』は無縁慈悲釈との関係において引用されたといえよう。つまり、この無縁慈悲釈によっても六即阿弥陀仏を示すことが明らかである。

それではなぜ源信は『阿弥陀経略記』において密意なる無縁慈悲釈や無量寿三諦説を説いたのであろうか。ここで注目したいのは、無量寿三諦説が阿弥陀の梵語「無量寿」を表すのに対し、無縁慈悲釈にはまさしく「無量光」の別名が付与されていることである。

『阿弥陀経略記』は、無縁慈悲釈を論じる箇所において以下のように述べている。

彼ノ諸ノ如來、雖モ知レルト二衆生ハ本來空寂ナリト一、常ニ放チ二如空ノ無數ノ光明ヲ一、徧ク照ス二如空ノ十方衆生ヲ一。……（中略）……是ヲ為ス三無縁ノ慈攝ニ取スト諸ノ衆生ヲ一。（『恵全』一・四一一頁）

ここでは、諸の如来が無数の光明を放って十方衆生を照らすのは、無縁慈悲が諸の衆生を摂取することと同じであるという。

また「無縁慈悲＝光明」を示す文が以下の三箇所において確認された。

應ニレヘシ知ル。十方三世ノ佛衆ノ法界ハ、不レ出テ二無縁慈悲ノ光ノ外ヲ一。（『恵全』一・四一二頁）

行人應ニヘシ二念願ス一。由ルカ二無縁慈光明ノ所照ニ一故ニ得レ顯スコトヲ二自佗身本三身性ヲ一。（『恵全』一・四一二頁）

但シ行住坐臥繋ケ二念ヲ彼ノ國ニ一、觀シテ下佛以テ二無縁慈ノ威光ヲ一照スト中十方ヲ上、稱ヘ名ヲ、一心ニ念シ、深ク信シテ、願フ生スルコトヲ彼ニレ。是レ為ス二往生極樂ノ綱要ト一。（『恵全』一・四一三頁）

さらに『阿弥陀経略記』は、『阿弥陀経』の「聞キ二説クコトヲ阿彌陀佛ノ一、執二持セムニト名號ヲ一」[24]を解釈して次のようにも述べる。

言フハ「聞キ二説クコトヲ阿彌陀佛ノ一、執中持セムニト名號ヲ上」者、觀シテ二彼ノ無量光明等ノ義ヲ一、稱ヘ名ヲ、心ニ念スノミ耳。今勸ムル二勝因ヲ一。故ニ如クレ是ノ説ク。非ス三全ク遮スルニ二彼ノ但信ノ稱念ヲ一。（『恵全』一・四一三頁）

すなわち、「聞キ説クコトヲ阿彌陀佛ヲ一、執二持セムニ名號ヲ一」とは、無量光などの義を観じて、名を称え、心に念じるだけであるという。

なお『阿弥陀経』は直後に「若シハ一日、若シハ二日……（中略）……一心不亂ナラハ」[25]という七日間の念仏行について述べており、この経文に対しても源信は「無縁慈悲」を読み取っていたことを銘記しておかねばならない。なぜならば、『阿弥陀経略記』の大意には「七日間で紫摩金の尊容を観じ、阿弥陀仏の名を称えて十念すれば、三悪道の苦果から脱する」とあるものの、それらはすべて無縁慈悲の莫大な功徳に支えられるからである。

さらに、ここで「無縁慈悲」と「光明」とに密接な関係が認められたとなれば、無縁慈悲釈は『往生要集』作願門だけでなく、観察門の「是レ三身即一ノ之相好光明ナリ也。」という文からも非常に大きな影響を受けていることが指摘できよう。[26]

加えて、この無量寿三諦説、無縁慈悲釈、六即阿弥陀仏を図示してみると興味深い関係性が窺える。

阿弥陀仏
- 無量寿（竪）―無量寿三諦説
- 無量光（横）―無縁慈悲釈

六即阿弥陀仏
- 未得聞――理即
- 聴聞信解――名字即
- 一心称念――観行即
- 蓮台託生後――相似即
- 百法明門後――分真即
- 成仏――究竟即

そもそも天台教学の行位論は初住、換言すれば円教の分真即を重視し、六即阿弥陀仏の中では「百法明門後」がそれに当たる。

すると、『阿弥陀経略記』には往生の正因となる無縁慈悲釈を論じ終えた次の項目「感果」において、以下の

如く論じられていた。

> 今示ス因果ヲ、唯タ在リ上品ノミニ。其ノ理可シ然ル。（『恵全』一・四一三頁）

すなわち源信は、極楽に往生する因果のうち、正因（無縁慈悲釈）による感果を上品者に限定するのである。[27]

そこで筆者は『観経』上品下生段の「得テ百法明門ヲ、住ス歓喜地ニ」[28]という記述を基に、源信の師である慈恵大師良源（九一二―九八五、以下、良源と略す）の『九品往生義』を検討してみたところ、『観経』の当該箇所が次のように解釈されていた。

> 今以テ宗義ヲ更ニ釋シテ云フ。「住スト歓喜地ニ」者。……（中略）……若シ望メハ圓教ニ應レヘシ云フ住スト初住ニ。今約サハ別意ニ言フ住スト歓喜地ニ。（『日仏全』二四・二〇三頁の上）

良源は『観経』上品下生段の「歓喜地」を明らかに円教の初住（分真即）と捉えるのである。

この『九品往生義』の文は、源信が正因による感果を上品以上に定めた直接的な根拠とみて間違いないが、『九品往生義』に六即説を論じることはない。

よって、良源の教学を継承して「百法明門後」を分真即に割り当てた源信は、『阿弥陀経』の密意である無量寿三諦説や無縁慈悲釈などの観心行に本有己心の六即阿弥陀仏を組み込むことで、独自の一大思想を完成させたのである。

結　語

以上、佐藤博士らの主張を手掛かりに『阿弥陀経略記』の無量寿三諦説が『往生要集』の影響を受けて成立することを論じてきた。これまでの要点を纏めれば、以下のようになる。

『阿弥陀経略記』に説かれる計六つの密意にはすべて三諦や三徳が配釈され、従来注目を集めてきた無量寿三諦説が「三諦の密意」に属することから、「三徳の密意」をも検討する必要性が生じてきたのである。そして、「三徳の密意」の中でも『往生要集』にその萌芽が認められる無縁慈悲釈を考察することで、次のような事実が浮かび上がってきた。

そもそも『往生要集』作願門は「理の四弘誓願＝無縁慈悲」と捉え、また事の四弘誓願では、「度」「断」「智」の前三願に「法」「報」「応」の「三身因」や「三徳」を割り当てている。また『阿弥陀経略記』の無縁慈悲釈においても「無」「縁」「慈悲」に「法」「報」「応」の「三身菩提」や「三徳」を配釈することから、この無縁慈悲釈は『往生要集』作願門をその萌芽として形成されたといえよう。また『阿弥陀経略記』が「無縁慈悲＝光明」と解する点より鑑みれば、『往生要集』観察門の「三身即一ノ之相好光明ナリ也。」などとの思想的連関も否定できない。

他方、無量寿三諦説は、『往生要集』観察門の「三身一体観」から成立すると考えられてきたが、事の四弘誓願の「無上菩提誓願証」の内容が「法」「報」「応」の三身を円満に証得する菩提を論じていたので、作願門にも「三身一体観」を読み取ることができよう。

さらに『阿弥陀経略記』は、阿弥陀の梵語である「無量光」に無縁慈悲釈を、「無量寿」に無量寿三諦説を担わせ、「光寿二無量」の観心行と本有己心の六即阿弥陀仏とを結び付ける一大思想を展開していた。そして、この観心行の修習を「上品者」に規定するのは、良源が『観経』上品下生段の「歓喜地」を円教初住（分真即）と解釈することに多大な影響を受けており、上品者による「修因感果」を光寿二無量（修因）の分真即阿弥陀仏（感果）にまで纏め上げたことこそ、源信最晩年に発揮した独自の思想といわねばならない。

したがって、『阿弥陀経略記』の無縁慈悲釈と無量寿三諦説は、ともに阿弥陀仏の「光寿二無量」を示し、『往

生要集』作願門及び観察門をその萌芽としていることからもわかるように、無量寿三諦説の成立を『往生要集』「三身一体観」に求める佐藤博士と花野先生の主張を補強したことはもはや明白であろう。

［附記］　本小論は平成十八年度山内慶華財団の援助による研究成果の一部である。／また執筆に際して、龍谷大学小山昌純先生には貴重なご助言を賜った。衷心より感謝を申し上げます。

註

① 『阿弥陀経略記』は、長和三年（一〇一四）三月九日に成立したとされる。（小山昌純「源信撰『阿弥陀経略記』に関する考察―東京大学総合図書館所蔵写本を基に―」、『西山学会年報』十四号、二〇〇四年）

② 阿弥陀三諦説は、『観心略要集』に「念ストハ二佛ノ名ヲ一者、其ノ意云何ン。謂ク於テ二阿彌陀ノ三字一ニ、可キナリ レ観ス二空假中ノ三諦ヲ一。彼ノ阿トハ者即チ空、彌トハ者即チ假、陀トハ者即チ中ナリ也。其ノ自性清淨ノ心ハ、凡聖ニ無ク レ隔テ因果ノ不レ改ラ。三世ニ常住ニシテ、二邊ニ不レ動セラレ、是レ中道ナリ也。百界千如、三千世間ノ諸法、森然トシテ而幻有ナルハ者、是レ假諦ナリ也。四句ニ推検スルニ不レ存セ一法ヲモ、亡ニ泯スルハ二三千一ヲ、是レ即チ空ナリ也。」とある内容を指している。（西村冏紹・末木文美士『観心略要集の新研究』（百華苑、一九九二年、六頁））

③ 西村冏紹・末木文美士『前掲書』に詳しい。

④ すなわち、末木文美士博士は「『無量寿』の三字に空仮中を割り当てるのは、いささかこじつけ的だとしても、一応それぞれの漢字の意味を生かしていると言うことができる。これに対して、阿弥陀三諦説においては、単に配当したというだけで、全く根拠が考えられない。それ故、『阿弥陀経略記』の無量寿三諦説から、『観心略要集』の阿弥陀三諦説の間には一線が引かれると考えられる。」と指摘している。（『平安初期仏教思想の研究―安然の思想形成を中心として―』、春秋社、一九九五年、四九五頁）

⑤ 佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、一九七九年、一六四頁）や花野充昭「中古天台文献と念仏思想」（佐藤哲英『前掲書』所収、三三〇頁～三三四頁）を参照。

⑥ 福原隆善「日宋天台浄土教の交渉―源信の源清記に対する見解を中心に―」（『叡山学院研究紀要』五号、一九八二

年、一九六頁）

⑦ 小山昌純「源信撰『阿弥陀経略記』の無量寿三諦説について」（『印度学仏教学研究』五一巻・一、二〇〇二年）

⑧ 梅田圓鈔「口伝法門に於ける源信の地位」（『龍谷学報』三一七号、一九三六年）

⑨『往生要集』は永観二年（九八四）冬十一月に起筆され、寛和元年（九八五）夏四月に完成をみる。つまり末文に「永観二年甲申冬十一月、於テ天台山延暦寺首楞嚴院ニ。撰ニ集シ斯ノ文ヲ一、明年ノ夏四月、畢ヘタリ二于其ノ功ヲ一矣。」（『恵全』一・二六八頁）とある記述に基づくものである。

⑩ 本書の撰述年は不明であるが、長徳三年（九九七）から同五年（九九九）頃に成立したと考えられている。（速水侑『源信』（人物叢書、吉川弘文館、一九八八年、一七五頁）や末木文美士『大乗仏典〈中国・日本篇〉』第十九巻（安然 源信、中央公論社、一九九一年、三二四頁）を参照）

⑪『恵全』一・三八二頁。またこの『阿弥陀経略記』の三門組織は湛然述とされる『法華大意』からの影響を受けて成立したという指摘がある。（小山昌純「源信撰『阿弥陀経略記』に関する考察―東京大学総合図書館所蔵写本を基に―」三一五頁～三一七頁）

⑫『恵全』一・三九五頁

⑬『恵全』一・四〇一頁

⑭『恵全』一・四一一頁

⑮『恵全』一・四二四頁

⑯『恵全』一・四三一頁

⑰『恵全』一・四三四頁

⑱『往生要集』は「初メニ行相トハ者、總シテ謂ハハ之ヲ、願フ作レラントト佛ニ心ナリ。亦タ名ク上ハ求メ二菩提ヲ一下ハ化スル二衆生ヲ一心上ト。別シテ謂ハハ之ヲ四弘誓願ナリ。此レニ有リ二一種一。一ニハ縁トスル事ヲ四弘願ナリ。是レハ即チ衆生縁ノ慈ナリ。或ハ復タ法縁ノ慈ナリ也。二ニハ縁トスル理ヲ四弘ナリ。是レ無縁ノ慈悲ナリ也。」（『恵全』一・七四頁）といい、四弘誓願を次のように理解している。

事の四弘誓願―衆生縁及び法縁の慈悲

理の四弘誓願―無縁の慈悲

⑲ この図は、すでに小山昌純先生の「源信撰『阿弥陀経略記』に関する考察―東京大学総合図書館所蔵写本を基に

―」に紹介されている。（三二二頁を参照）

⑳『一乗要決』の巻頭に「寛弘丙午の歳冬十月」とあることからもわかるように、寛弘三年（一〇〇六）源信六十五歳の著作である。（『恵全』二・一頁）

㉑三身と三因仏性との関係については、『摩訶止観』を引用して「止観第五ニ云ク。應佛ハ從リ二緣因一生シ、報佛ハ從リ二了因一生シ、法佛ハ從リ二正因一生スト。已上」といっている。（『恵全』二・一九一頁）

㉒このような理解はすでに小山昌純先生によって指摘されている。（「源信撰『阿弥陀経略記』の無量寿三諦説について」一〇四頁を参照）

㉓すなわち「觀經ニ云ク。心ニ想フレ佛ヲ時ハ、是ノ心即チ是レ三十二相・八十隨形好ナリ。是ノ心作佛ス。是ノ心是レ佛ナリト。又起信論ニ説ク。一切衆生ノ心性眞如ノ中ニ具ス二過恒河沙數諸佛ノ功德ヲ一。取意文」とある。（『恵全』一・四一五頁）

㉔『浄全』一・五四頁

㉕右同

㉖『往生要集』が光明に関して言及するのは観察門の当該箇所だけではない。すなわち、雑略観には「彼ノ一一ノ光明、遍ク照シ二十方世界ヲ一、念佛ノ衆生ヲ攝取シテ不レ捨テ」（『恵全』一・一〇八頁）に続いて、「我モ亦タ在リ二彼ノ攝取ノ之中一ニ。煩惱障ヘテレ眼ヲ、雖モレ不トレ能ハレ見ルコト、大悲無クシテ倦キコト常ニ照ス二我カ身ヲ一。」（『恵全』一・一〇八頁）という有名な一句がある。ここで源信は、光明に摂取されることと大慈悲に照らされることを同時に列ねており、当箇所も『阿弥陀経略記』の無縁慈悲釈に大きな影響を与えたといえよう。

㉗『阿弥陀経略記』における往生の決定や現生による菩提からの不退転などについては、小山昌純先生の「源信撰『阿弥陀経略記』における現生不退転説の思想的展開」が詳しい。（村中祐生先生古稀記念論文集『大乗佛教思想の研究』所収、二〇〇七年、山喜房佛書林）

㉘『浄全』一・四八頁

キーワード　源信　『往生要集』　『阿弥陀経略記』　無量寿三諦説　無縁慈悲釈　六即阿弥陀仏